

第1回小倉特別講義および連携セッションの報告

小倉特別講義実行委員会（渡部雅浩，坪木和久ほか6名）

2018年10月29日，仙台国際センターにおいて標記の特別講義を開催した。本講義は，気象学会として行ういわゆる冠レクチャーの初めての試みで，小倉義光・正子基金活用の一環として1年以上の準備期間を経て開催の運びとなった（本講義の趣旨は「天気」2018年5月号を参照）。秋季大会開始前の午前中であったが参加者約250名と，広い会場が満員になるほどの盛況であった。

小倉特別講義は回ごとに異なる分野から著名研究者を招聘するが，初回ということで，小倉義光先生に関わりの深いメソ気象学分野を選び，小倉先生のかつての教え子で現在は数値メソ気象学の第一人者であるRobert Fovell教授（ニューヨーク州立大学オールバニ校）をお呼びした（第1図）。講義の題目は，「How Ice Crystals Steer Typhoons」で，講義と質疑応答はすべて英語で行われた。今回，残念ながら小倉先生にご出席いただくことは叶わなかったが，実行委員会とFovell教授がそれぞれ事前に小倉先生と電話や手紙でやりとりしており，小倉先生もFovell教授による講義開催を心より喜んでおられた点を報告しておく。Fovell教授も，講義の冒頭でご自身の研究キャリアに関係づけて小倉先生の業績を紹介され，奥様正子様への気象学への貢献にもふれられた。特に教科書を通じてしか小倉先生を知らない学生にとっては印象に残るイントロダクションになったであろう。

講義の内容は，一般にはやや難しかったかもしれないが，気象学会員には非常にわかりやすく，示唆に富むものであった。台風のシミュレーションにおいて，台風の雲に伴う放射加熱が台風のサイズを拡大するプロセス，加熱をもたらす雲内の氷粒子（雪やあられを含む）を表現する雲物理パラメタリゼーションが異なることで，台風進路に顕著なばらつきが発生することなど，メソスケールの力学・雲物理・放射・乱流過程にまたがる内容であった。Fovell教授の研究成果をもとに現業台風予報モデルを改善するくだりなどは，気象庁とメソ研究者にとって非常に面白いものだったと思う。

海外からの講師を招く貴重な機会であるので，小倉特別講義と連動する形で，同日午後に小倉特別講義連



第1図 Fovell教授による講義の様子。

携セッションを開催した。これは，海外からの講師に日本の研究状況を知っていただくとともに，講義で扱う研究分野を概観することで学会活動を盛り上げることを意図したものである。今回は，「メソ気象研究の現状と今後の課題」と題して，国内のメソ気象研究を様々な視点から紹介する7件の講演で構成された。講演の内容はテーマ毎にレビュー的なものに最新の状況を加えて，それぞれのトピックでの全体像と新しい点の位置づけが分かるようにお話しいただいた。主な内容は，竜巻についての国内外の研究，「京」を用いたビッグデータ同化，レーダや特殊ゾンデを用いた雲・降水の研究，多様なメソ低気圧についての研究，最新のフェーズドアレー偏波レーダを中心とした研究，日本の大雨の多くをもたらす線状降水帯，および最近始まった台風の航空機観測についてであった。午前に引き続き会場が満員になるほどの聴衆で，Fovell教授もすべての講演を興味深く聞かれていた。

講義後に回収したアンケートを集計すると，ほぼ100%の参加者が今回の小倉特別講義を有意義であったと感じていることが分かった。また，今後もこうした取り組みを続けるべき，という意見も大多数であり，取り上げてほしい分野や招聘して欲しい講師について，さまざまご意見をいただいた。こうした会員

からのフィードバックを参考にしつつ、小倉特別講義実行委員会では第2回の講義を2019年度秋季大会の期間中に開催することを検討している。詳細が決まり次第、学会ホームページやメーリングリストを通じてご案内するので、楽しみにお待ちしております。なお、第1回小倉特別講義は、会員による大会講演を阻害す

ることのないようにスケジュールを組んだが、本講義のために秋季大会の口頭発表の持ち時間が削られたのではないかと誤解された方もいたようである。今後も、大会の講演数と時間は十分に確保しつつ、エキサイティングな小倉特別講義をお届けするように努めたい。